

図書館報 みかづら

和歌山県立医科大学図書館三葛館

目次

世の中に絶えて本のなかりせば-----	1	私にとっての図書館とは-----	5
みかづら考-----	2	出会い-----	6
図書館について-----	3	私流本の楽しみ方-----	7
闘病記コーナー With -----	3	平成21年新規購読・中止タイトルについて-	7
看護に全く関係のない旅-----	4	平成19年度三葛館活動記録-----	8
癒しの三葛館-----	4	平成19年度利用統計-----	8
本で遊ぼう-----	5	編集後記-----	8

世の中に絶えて本のなかりせば

保健看護学部 教授 庄 司 禎 夫

活字中毒ならいざ知らず、普通の本好きにとって本選びは、楽しみの一部とはいえ、やはり一苦勞である。買って後悔、読んで後悔。やっと私も賢くなった。このごろは読書のプロに頼る。

さいわい、新聞にも週刊誌にも読書欄というものがあり、名だたる本読みの手練れがえりすぐりの本を推薦している。そこから選ぶ。ざっと目を通し、そそられたものをメモしておき、店頭で思い出せば、それを買う。

しかし、これで大船とはいかない。買った本がちんぷんかんぷんということがある。背伸びしすぎているらしい。こんなときは、自らの今後の成長を期待し、積読しておくほかない。とにかく本選びには苦勞する。

なぜ苦勞するのか・・・なぜ本を読むのか・・・なぜ勉強するのか・・・本当のところはよく分からない。おそらく、読む道と読まない道の違いはあるが、道そのものはあって、そのどちらが上ということもないのだろう。ただ私は、「過去の、奇跡のような時間よ、今一度！」と願ってはいる。

みかづら考

保健看護学部 教授 柳川 敏彦

本誌のタイトル「みかづら」は、現代仮名遣いでは「みかずら」が使われるはずなのになぜ？と疑問に思った。ところで、恥ずかしい話であるが、はじめて紀三井寺の近くに三葛という地名があるのを知った時、「みくず??」と、読めなかったことが思い出される。

「葛」は、漢字辞典では「かずら」、「くず」の2つの読みが記載されている。「かずら」はつる草の総称であり、「くず」は秋の七草のひとつで、根は風邪薬に使われる葛根湯（かっこんとう）、あるいは葛湯（くずゆ）になる。広辞苑などの辞書を虫眼鏡で見ると、下の部分は「勾」ではなく、「勾」の字が使われている。しかし、広辞苑では「くず」と「かずら」の関係は記載されていない。そこでインターネットの登場となるが、「くず、かずら」とYahooで検索すると、葛の語源は、奈良県吉野郡の国栖（くず）から来ていて、そこに群生している蔓草（かずらぐさ）を食用にしたり、その繊維を使い織物を作ったりと、その蔓草を「国栖（くず）の使うかずら」→「くずかずら」と言うようになり、それがいつしか「くず」へと変化したという説明にたどり着く。さて、「かづら」は「かつら、鬢」につながり、やはり現代仮名遣いは、「かずら」となる。

ここで、現代仮名遣いであるが、「鼻血」、「同時」は、それぞれ間違いなく「はなぢ」、「どうじ」なのに、「地面」は「じめん」で、「世界中」は「せかいじゅう」となる。また、「へん、つくり、音読み」ということで、「読書」は「どくしょ」と読まれ、「読」のごんべんがいとへんにかかわると、「連続」は「れんぞく」となる。和歌山弁は、「明日からは絶対つかわないぞ」は、「でったいつかわないど」と宣言され、名前の「望」は、役所の受付で「のどみ」となる。

「みかづら」から頭の中をよぎった連想ゲームである。本稿を読んだ方は、「葛、鬢、蔓」以外の文章は削除願いたい。はたして、「みかづら」の名付け親はだれなのか。（答えは、地名の由来とともに創刊号に載っています。）



図書館について

保健看護学研究科 教授 松井和子

新参者の私に三葛キャンパスで馴染みの場といえば図書館でしょうか。三葛館は館というにはやや小規模、でも意外な本に出会って興奮したり、闘病記コーナーの“With”の命名にも感動しました。難治性疾患・障害を持つ人たちと調査研究を通じて長いこと係わってきた私には、学生の皆さんが疾病障害を持つ人々と共に歩もうとする意味を“With”に感じたからです。

私は重い障害や進行性の疾病を持つ人々の辛さ、苦しさをなんとか理解したいと思い、当事者の語りや記録に関心を持ってきました。闘病記の著者は、大半がプロの書き手ではありません。内容が主観に偏ったり、表現に物足りなさを感じることも多々あります。その補完として小説やエッセイを意図的に読んできました。“身体がこわい”、“蛇の生殺しのよう”、“死刑の宣告を受けるような気持ち”などと表現する人たちの思いを理解したく、関連する本を探し求めてきました。中には重い障害を持つ人から薦められて読んだ本もありました。自宅に戻れず、施設で生活せざるを得なかった青年からぜひにと薦められた『収容所群島：1918-1956：文学的考察』（ソルジェニーツィン著；木村浩訳，新潮社，1974）もその一例でした。

人と係る仕事に従事する人は知性と想像力を磨くことが必須と強調されますが、それには人間性や社会の矛盾など深く追求した本をたくさん読んでいくことではないかと思います。ただ心配なのは、本、とくに小説は面白いので読み出したら止まらなくなり、つい他のことがおろそかになってしまうことです。その時間的兼ね合いが難しいのですが、学生の皆さんにはぜひ在学中にできるだけたくさん小説やエッセイを読み、読書の面白みを実感するとともに想像力を豊かにしてほしいと願っています。

闘病記コーナー With (ういず)

平成20年4月、疾患についての知識や、患者様の心理を理解するための手助けとなる闘病記をまとめて、コーナーを設けました。疾患に関する患者様ご本人や家族、第三者による、闘病、介護、育児などの記録をまとめています。本コーナーの名称は、「図書館三葛館 学生・教職員参加企画第2弾」として募集し、応募いただいた13作品の中から投票の結果、保健看護学部1年(当時)学生作品「With」に決定いたしました。

「With」には、「with」という単語には、「～と一緒に」という意味が含まれており、闘病生活には「～」にたくさんの方が関与している。私たち医療者になるうとする者にとって、「～」に入ることが大切で、学生である今も人ごとではなく、その人の身になって一緒に考えていくことが必要」という思いが込められています。闘病記コーナーWithに配架している図書は、OPACで検索する時に、キーワードに「闘病記」や「(疾患名)」を入力して検索できます。

本を通じて患者様やご家族と一緒に考えてみるきっかけをつくりませんか。

看護に全く関係のない旅

保健看護学部 講師 武用 百子

昨年11月、私はLes Freres（レ・フレール）というピアノの連弾奏者、兄弟デュオのコンサートを聴きに行った。そこで見たもの、聴いたものは、もはや“ピアノ”という楽器による演奏ではなく、確かに“バンド”であった。総立ちし、ノリノリになっている聴衆の姿は（もちろん私もその1人なのだが...）、この日本、いや和歌山ではありえない姿であつただろうと思う。その感動は数ヶ月経つ今でも脳裏に焼きついていて離れない。

このように時々私は、“看護”に全く関係のないところに旅に行く。“看護”に疲れたという訳ではない。援助を求める人の前に、援助者として立つとき、“看護”だけの知識では到底理解できないその人の背景がある。私は“看護に全く関係のない旅”がその人の理解に大いに役に立っていると思う。

図書館や本屋、CDストア、映画館は、その“旅”がすぐのできる場所である。年々視野狭窄になる思考の枠を、広げてくれていると感じる。特に図書館や本屋は、そのとき“自分に必要な旅”に出会わせてくれるものである。「今これを読みなさい」と言わんばかりに迫ってくる本のタイトルが現れるのだ。それは偶然が必然になる瞬間であり、そのときそのとき出会う“看護に全く関係のない旅”に逆らわずに出かけていくのも楽しいものだ。ゆとりのない中でも、その“旅”に出かけていける遊び心を、いつまでも捨てないでいたいと願う。

癒しの三葛館

保健看護学部 助教 上田 伊津代

昨年の4月から教員として本学に戻ってきた私にとって、三葛館は癒しの場です。元々読書が好きだということもありますが、何故か三葛館の匂いが好きなのです。もちろん文献や専門書を探すという目的がほとんどですが、仕事の集中力が切れた時に癒しを求めてひょっこり訪れたりしています。

そんな三葛館ファンである私は、最近サボりがちではあるものの、学生時代には暇があれば色々な本を手にしていました。特に印象深い本として、高校生の時に読んだ『シーラという子』という本があります。本の内容は、シーラという性的虐待を受けている6歳の少女が、この本の著者であり教師であるトリイ・ヘイデンと出会い、時には衝突しながらも、次第に絆を深めていくというものです。愛を知らないシーラが、トリイからの無償の愛を知り、少女らしさを取り戻していく過程にとっても感動した記憶があります。実話なのでスッキリ！というラストではありませんが、この本には続編『タイガーと呼ばれた子』もあり、トリイとシーラのその後を知ることが出来ます。この1冊の本から、人が人を傷つける愚かさ、人が人を愛する素晴らしさを学ぶことができました。

本を読む時、字と字をたどって内容を理解するのと同時に、その字間や行間に隠されている筆者の想いを汲み取る作業をしているのだ、と私は思います。学生のみなさんには是非、この相手の想いを汲み取る感性をどんどん養って頂きたいと思います。私は、その1つの方法として「読書」をお勧めいたします。追記として、私が三葛館を漂っている時には疲れている時だと思ってそっとしておいて下さいね。

本で遊ぼう

保健看護学部 講師 黒田裕子

字を読むことができる事はすばらしい。

小さいころ、長野県南端の県境の村で育った私は幼稚園や保育所に通っていない。村にはそういった施設がなかったのである。4人姉妹で育った私は、上二人の姉が学校に通うのがうらやましくて仕方がなかった。本を読みたかったのだが、字が読めない。そこで家にある雑誌や本を広げて、ひとりで勝手にお話を作って遊んでいた記憶がある。小学校に上がってから図書館はいろいろな知識の宝庫でわくわくする場所であった。いまだに時間があつたら、ずっと図書館に座って手当たり次第に本を読んでみたい誘惑にかられる。しかし、凡人である私は、いざそうなったらその時間を図書館に行って読書の時間にするのではなく、車での外出や家でのごろ寝の時間にあててしまい、次の時にと後延ばしをするのである。

ところが、そうでない人間のことを知った。皆さんもご存じであろう和歌山の生んだ鬼才、南方熊楠である。彼は10歳から15歳の間に『和漢三才図会』105冊をすべて書き写している。それも見ながら筆記したのではなく、友人宅の本を読んで覚えて家に帰り、記憶をたどって書き写したのである。彼はその後、20歳代に米国から英国に渡り、大英博物館の日本資料整理を手伝うが、その間に17カ国語を駆使し、さまざまな書物を読み漁っている。本当に博学、百科事典のような男であった。英国で専属学芸員にならないかという話があったが、縛られるのがいやで断っている。彼は「人生は短い。自分の学びたいことに時間を使いたい」と言っていたらしい。その後帰国した彼は学歴社会では認められなかったが、独学で論文を書き当時のネイチャーに数十の論文投稿も行っている。世界では名の通った粘菌学者である。(神坂次郎著『縛られた巨人 南方熊楠の生涯』新潮社、1991)

このような本を読むと、自分を忘れて、熊楠のように自分も世界に羽ばたいような気になってくる。本を読む楽しさは、経験できない体験を本の中で味わえる事ではないだろうか。

仕事に疲れた時に頭をリラックスさせるには、仕事に関係のない本を読んで楽しむ私である。

私にとっての図書館とは

保健看護学部 助教 大東千晃

皆さんにとって図書館とはどのような場所でしょうか。「本を借りる場所」、「本を読む場所」、「授業の資料を探す場所」など、いろいろな答えが返ってくると思います。

学生時代、私にとって図書館とは勉強をする場所でした。私が学校の試験勉強、また国家試験の勉強を行う場所はいつも図書館でした。特に看護師の国家試験の勉強を行う時は、開館時間中ずっと学校の図書館にいたような気がします。勉強なら家でやればいじやないかと言われるかもしれませんが、家ではテレビや雑誌など勉強を妨げるものがたくさんあり、その誘惑に負けてしまいなかなかはかどらなかったのです。しかし、図書館に行くと、なぜか勉強がとてはかどりました。それは図書館という独

特有の雰囲気のおかげかもしれません。家とは違う空間で勉強を行うことによって、ここは勉強をする場所と自分の中で区切りをつけ、集中することができたのではないかと思います。

それ以外に、図書館で勉強することの一番の利点は、疑問が出てきた時、その場ですぐに調べて解決することができるということです。学生時代はお金がないため、あれもこれもと何冊も参考書を買うことができませんでした。しかし、図書館にはたくさんの参考書がそろっています。それを活用し疑問を疑問のままにせず、すぐ解決することにより勉強の効率がよくなりました。私にとって図書館はとても良い勉強環境だったと思います。特に学校の図書館の場合、参考書を読んでもわからない時はすぐ近くに教えてくれる先生方がたくさんいらっしゃいますし。

皆さんも家でなかなか勉強がはかどらない時、やる気が起こらない時は、気分を変えて図書館で勉強を行ってみてはいかがでしょうか？

出会い

保健看護学部 助教 檜 葉 歩

みなさん、こんにちは。4月から主に精神看護実習を通して学生のみなさんと関わらせていただいています。私自身、臨床の場を離れ、母校であるこの大学に教員として戻るなんて想像もしていませんでした。実習ではみなさんの元気なパワーをもらい、実習を楽しんでいます。

ところで、図書館とはみなさんにとってどのような場所ですか？ 私はもともと本を読むことは苦手なので、学生の時はあまり足を延ばすことがなかったのですが、今になって考えると、図書館は「いつも待っていてくれる場所」と感じています。自分が探している何かを求めて行った時、いつも並んで待っていてくれる。本にとってはそこが居場所であり、役割なのですね。図書館には、図書館にしかないにおいや空気を感じます。本の重みや質感が落ち着きを与えてくれると思っています。その独特の雰囲気の中で自分に合ったものを見つけ出すことができるのだと思います。本を読むことが好きな人もそうでない人もいると思いますが、自分が読んでみたい本、フィーリングが合うと感じた本に出会ってください。図書館に行って図書館と調和してみてください。

人と人との出会いも貴重ですが、自分を成長させてくれる本との出会いも大切だと思います。本との出会いがこれからの人生に大きな力を与えてくれると信じて。

最後に、いつもその出会いの橋渡しをしてくれている司書の方々にも感謝し続けたいです。



私流本の楽しみ方

保健看護学部 助教 中村美絵

私にとっての本の楽しみは、読むことと探すことです。学生時代は暇があれば本屋や図書館に行って気に入った本を探し、お気に入りの本を繰り返し読んでいました。

もともと、去年は一年があっという間に終わってしまい、気がつく仕事絡みの本ばかり読んでいて... 趣味の本が手元に無い！という状況に。しかし「読書のための時間」と特別に考えて作ろうとすると優先順位がどんどん下がり、結局元通り。何かしながら本を読むにはどうするかと考えた末、今は毎日入浴の時に好きな本を持ち込んで楽しむことにしています。入浴時間内のことなので一度にたくさんは読めませんが、薄い本なら2～3日で読めます。更に少しずつの時間なので、今まで手に取って来なかったジャンルの本も読むようになり、楽しみが広がりました。本の中で小旅行気分になれるお手軽な私には、これは驚くべき新たな楽しみです。今後は本を探す楽しみの方をもっと取り戻したいと思います。

読書により知識や発想を得ていくことはとても楽しく、視野が広がるととても有意義なことだと思います。また、読むだけでなく、本を探すことには、内容を想像したり新しい発想を手に入れる楽しみもあります。カバーを眺めて何の本かなと想像するだけでも楽しいですよ。本を読むのが苦手な方も、人生の中で1冊くらいはとっておきの本に出会えるはずですよ。まずはお気に入りの一冊を探すために、本に目を向ける時間を作ることから始めてみませんか？



平成21年 新規購読・中止タイトルについて

新規購読

Hands-on
ナースビーンズ smart nurse
Nursing business
リハビリナース
産業看護
糖尿病ケア

購読中止

Perception
英語教育
ジュリスト
漢方研究
毎日ライフ (休刊)
おはよう 21
月刊新医療
心臓

平成19年度（2007年度）三葛館活動記録

- 4月12日 保健看護学部 新入生オリエンテーション
- 4月21日 日本看護図書館協会第17回総会（大阪市立大学）
- 5月1日 第1回保健看護学部図書委員会
- 6月27日 保健看護学部3年生「保健看護研究Ⅰ」 文献検索指導
- 7月4日 保健看護学部3年生「保健看護研究Ⅰ」 文献検索指導
- 7月13日 株式会社リコー図書館システムユーザー会（スイスホテル南海大阪）
- 7月17日 附属病院看護師職員研修 文献検索指導
- 8月2～3日 日本看護図書館協会第36回研究会（仙台市立看護専門学校）
- 8月22～24日 国立情報学研究所 NACSIS-CAT 目録システム講習会（大阪市立大学）
- 8月27～31日 蔵書点検
- 9月25日 国立情報学研究所図書館とNIIの集い（キャンパスプラザ京都）
- 10月2日 第2回保健看護学部図書委員会
- 11月2日 図書一括購入入札説明会
- 11月7～9日 第9回図書館総合展（パシフィコ横浜）
- 11月16日 保健看護学部「保健看護英語」 海外文献検索指導
- 2月27日 第3回保健看護学部図書委員会
- 2月29日 シンポジウム「図書館利用者を知る LibQUAL+®によるサービス評価」（大阪大学）
- 3月5～11日 書庫・移動書架新設及び移設工事

編集後記

平成21年度に、医学部基礎教育棟が三葛キャンパスに移転する予定があり、現在、新教育棟の建設が着々と進んでいます。これまで、保健看護学部、大学院保健看護学研究科、助産学専攻科のキャンパスであった三葛キャンパスに、はじめて医学部の教員や学生が仲間入りすることになります。キャンパスに変化がある今年は三葛館にとってもCHANGEの年となるでしょう。さて、自発的にCHANGEできるのか、強制的にCHANGEせざるを得ないのか…。その両方が有機的に作用しながらCHANGEしていくことを楽しみたいと思っております。

執筆者の皆様にはお忙しいところご寄稿いただきまして誠にありがとうございました。(J.S.)

平成19年度利用統計

年間開館日	235日
入館者数	34,970人
(1日平均)	148人
貸出人数	6,071人
図書貸出冊数	15,089冊
視聴覚資料貸出件数	314点
相互利用依頼件数	384件
学外利用者数	1,303人



平成21年3月31日発行
 図書館報 みかづら (第12号)
 発行 和歌山県立医科大学図書館三葛館
 〒641-0011 和歌山市三葛 580 番地
 TEL (073) 447-2300 (代表)
 (073) 446-6721 (三葛館)
 FAX (073) 446-6730 (三葛館)

